



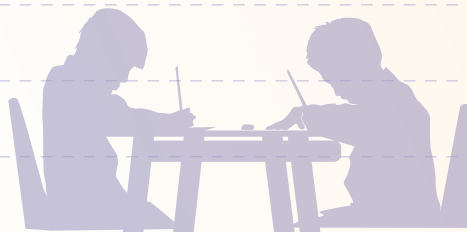
特集

「小6 統一合判」 中学入試レポート vol. 4

これが合格への カギになる！

2020年入試の変化のもとで、 チャンスを生かす受験校の選び方

9月以降、6年生が夏休みを終えて、本格的な入試対策に取り組み始めてから、すでにひと月半。来年2月の入試本番まで残り3カ月半となった。保護者の皆さんも、いよいよ併願校を含めて、受験校を決めていく時期にさしかかっている。年ごとに多くなる入試要項変更によって、“激動”が恒常化してきた中学入試だが、来春2020年入試はどうなるのか。目立った動きを確かめてみるとともに、そこで生まれるチャンスを生かす、受験校の選び方を探ってみよう。



首都圏模試センター

変わる大学入試5年目の当事者にあたる 小学校6年生と保護者に必要な視点

毎年、多くの入試改革が行われることで目まぐるしく人気動向が変わってくる首都圏中学入試。例年、前年入試の直後から、次年度に向けての入試変更が次々と公表され、それぞれの学校の志望者数や難易度の変化、全体的な人気動向の変化などが、その翌年入試に関する話題となっていく。

そういう意味で、今春2019年入試の結果やその前後の目立った動向から、来春2020年の首都圏中学入試の行方を占うとすれば、やはり注目すべきは「2020年大学入試改革」による影響も含めた、昨今の人気傾向と「私立中入試の多様化」だ。

すでに1年3か月後に迫った「2020年度からの大学入試改革（初年度の「大学入学共通テスト」は2021年1月16日・17日に実施）」を境に、大学入試が変わる。さらにその先の大きく変化する社会で求められる力を育てるために、日本の教育全体が変わろうとしているなかで、私立中高一貫校はいま、「21世紀型教育」に象徴される“最先端”の教育を導入し、あらためて公立学校の教育をリードし、日本の教育を救う存在になろうとしている。

ただ一方で、大学入試改革の初年度にあたる2020年度の大学入試のあり方は、この時期まできても不透明な要素を多く抱え、まだ混乱のうちにあるという状況だ。東京大学をはじめとするいくつかの有力な国公立大学は「英語の民間検定」のスコアの採用には同調しない姿勢を示し、当初予定された「英語民間検定」指定各社のうち、TOEICが撤退を公表した。全国の高等学校や高校生からは、新入試制度の先送りの要望書まで出されている始末だ。

それらの要望や混乱に対し、文部科学省は9月下旬段階ではまだ対応を明らかにしていないが、いずれにしても初年度の「2020年度大学入試」は、多くの混乱と矛盾を抱えてのスタートとなる見通しが強まってきた。

しかし、はっきりといえることは、現在の小学校6年生が大学入試に挑むのは、改革初年度の2020年度から5年目を迎えた2025年度（2026年1～3月）の大学入試。大学入試のあり方が「本格的に変わる」といわれる第2期入試改革（2024年度～）の2年目ということになる。2020年から中学校に、翌2021年から高校で全面实施される新『学習指導要領』に基づいて行われるこの2024年度以降の大学入試のあり方は、初年度の2020年度と比べて相当に大きく変わることはないはずだ。

また、仮に現時点での大学入試改革の行方が不透明だとしても、いまの小学生の保護者にとって最も大切なことは、わが子が大学や大学院を卒業して社会に出る2030年以降の世の中で求められる力を想定し、その時代にわが子が「より良く生きる」ことのできる力を育ててくれる教育環境を選び出すことにあるはずだ。

そして、いまの小学生が社会に出て約15年後の2045年には、「AI（人工知能）の能力が人間の能力を上回る」といわれる「シンギュラリティ（技術的特異点）」と呼ばれる転換期が訪れると予測されている。

この変化について、「現在、人間がしている仕事の約半分がAIに取って代わられる」とか「AIに仕事を奪われる」といった危機感を強調するような論調をマスコミ報道などでよく目にするようになったが、何も悲観的になる必要はない。そうし

今春2019年入試はどうなった？

従来型 4科・2科	最難関・準難関校の多くが志願者増 人気校の新設午後入試に人気集中
得意科目 選択・特化型	算数1科・国語1科(1科特化型)の人気増 1科・2科・3科選択(得意選択型)の人気増
新タイプ 適性検査型	適性検査(各種含む)型入試の志願者増 計6,524名が適性検査型入試に合格
新タイプ 英語(選択)	英語(選)入試の志願者増 計1,002名が英語(選択)入試に合格



特集

これが合格へのカギになる！

2020年入試の変化のもとで、チャンスを生かす受験校の選び方



4科目の教科型入試のなかで「思考力・表現力」を問いつけてきた麻布中写真は2019年入試風景。

新たな時代の変化によってもたらされるものは、人間にとってプラスになることも多いはず。本来はそのためにAI（人工知能）の研究が世界的に進められていると解釈すれば良い。

ただし、その近未来の新たな時代に、AIと共存し、それを上手に使いこなし、必ずしもAIが得意としない（たとえばコミュニケーション力や共感力などの）領域で力を発揮できる力を身に着けられるような「学び方」ができる教育環境を選び、中高6年間の「学び」のなかでそれを経験しておくことは、今後いっそう重要になってくる。

これからの中学受験における「学校選び」には、確実にそうした保護者の視点が大切になってくると考えておきたい。

今春2019年入試で目立った動きと傾向は来春2020年入試でも引き継がれる！

そして、これまで述べてきた大学入試の変化や将来の社会の変化が想定されるもとで、この1～2年の中学入試では次のような人気動向の変化（人気傾向）が目立っている。

①多くの難関校の志願者増。

⇒難易度の高い学校への強気のチャレンジ傾向。

②都心部の有名大学付属校の人気増加。

⇒行方の定まらない大学入試改革への不安と、新たな高大連携教育への期待。

③「午後入試」のさらなる増加。

⇒午後の「1科入試」新設も含め、午後入試実施校はますます増加。これによって「入試の前倒し」傾向がさらに進む。

④2月2日が日曜にあたることによる“プチ・サンデーショック”の影響も。

⇒青山学院や東洋英和女学院などプロテスタント校が入試日を移動。恵泉女学園は全回とも「午後入試」に。逆に暁星中は従来の4科入試を2月3日から2日に移動して、2月3日PMに2科入試を新設。

⑤私立中入試の多様化。

⇒2020年度以降の大学入試の変化を先取りし、そこで新たに求められる力を、従来の教科型（4科目・2科目の）入試とは違った評価軸による「新タイプの入試」で試そうとする私立中が増加。すでに首都圏の私立中の過半数にあたる約170校が、以下に紹介したような何らかの「新タイプ入試」を実施している。

⑥従来の「教科型入試」のなかで「思考力」を問う出題の増加。

⇒上記のような「新タイプ入試」を実施しない私立中のなかでも、従来の4教科あるいは特定の教科のなかで、意図的に「思考力」や「記述力（表現力）」を問う出題を入れてくるケースが増加。2018年入試での開成中の国語の大設問[二]の出題が、まるごと「適性検査」の形式と酷似していたことが話題を呼んだ。

上記の①の「多くの難関校の志願者増」の傾向は、今春2019年入試では非常に目立った。とくに2月1日入試の男子校、女子校の最難関、準難関グループに位置する学校の大半は志願者が増加し、1月中や2月2日以降の入試でも、似た傾向が見られた。その意味では、「何が何でも難関校をめざす」タイプの受験生と、それ以外の（受験準備期間や学校選びの志向の違いなど様々な意味での）受験生との“二極化”がさらに進んだといえるだろう。

いずれにしても、そうした最難関・準難関グループに位置する学校に挑んでいく受験生には、親子とも強い気持ちと覚悟が必要になるということだ。

また、算数や国語の「1科入試」を含む午後入試の新設校が増えたことから、早い段階での押さえ（＝滑り止め）の併願がしやすくなったことによって、さらに「思い切って難関校に挑戦しやすくなった」という側面もあるだろう。

続いて②の「**都心部の有名大学付属校の人気増加**」については、今後の「大学入試改革の行方」に対する不安もさることながら、この2～3年の大学入試では、東京23区内の私立大学の「入学定員厳格化」によって、上位の私立大学の難易度が実質的に高まり、早慶やGMARCHといわれる大学に合格しにくくなったという現象にも起因していると思われる。

また、「SGU（スーパーグローバル大学）」に代表される各大学が、世界大学ランキングに名を連ねる大学になるために、英語での授業や留学生の受け入れをはじめ、いわゆる“世界標準”教育環境をめざし、一方では高大連携や付属校・教育提携校の拡大戦略を推し進めてきたことも、小学生の保護者の注目と期待を集めることにつながっているといえるだろう。

続く③の「**『午後入試』のさらなる増加**」は、来春2020年入試でも進み、「算数1科」の入試の増加を筆頭に、まだじわじわと増え続けている。これも「早く合格を得ておきたい」という受験生や保護者の願いと、「早く合格～入学者を確保しておきたい」という私立中側の思惑とが一致して歓迎されているものなので、そうした受験機会を上手く活用することは大事だ。

しかし、ひとつ気をつけておきたいことは、午後入試だからといって、「単なる押さえ（＝滑り止め）の併願校」と考え、その学校の教育理念や校風を良く調べもせずに受験することは避けておきたい。もし結果的にその午後入試校に進学することになった場合に、（とくにミッション・スクール

などの）教育姿勢を理解していないと、ミスマッチを生む原因になる。くれぐれもその点だけは注意しておきたい。

そして、④の「**2月2日が日曜にあたることによる“プチ・サンデーショック”の影響**」は、全体に及ぼす影響は“2月1日サンデー・ショック”の年ほど大きくはないものの、局地的には人気動向に多少の影響を与える。これによって入試日が移動するなどして、競合校との関係が変化しそうな学校については、今後も志望動向を注意深く見守っていく必要があるだろう。

そして、⑤の「**私立中入試の多様化**」は、この2～3年の中学入試に見られる“最大の変化”といってもよい。次ページから紹介している⑦～⑩の傾向は、いずれもこの「私立中入試の多様化」のバリエーションの一環であり、同時に「2020年入試大学入試改革」を、多くの私立中学校が、いわば“先取り”したというメッセージでもある。

それならば受験生と保護者は、これらの多様化した入試が、わが子の「未来につながる学びである」と理解して、そうした受験チャンスに積極的に目を向け「わが子の強みを生かしていく」ことも、来春2020年入試で合格をつかむための突破口のひとつになるはずだ。

そして、⑥の「**従来の『教科型入試』のなかで『思考力』を問う出題の増加**」も、意味的には上記の⑤と同様に理解しておくべきだろう。こうした「思考力を問う」出題は、来春2020年入試でも、その翌年以降の入試でも確実に増えていくことが予



男子校のなかでは、いち早くグローバル教育にシフトして注目されている海城中（写真）は2019年入試風景。



想される。個々の受験生にとって、「中学受験がゴール」ではなく、「中高6年間の新たな学びのスタート」であることを考えれば、こうした入試問題に正面から向き合うことは、必ず将来のためにもなる。そういう気持ちで、志望校の過去問題にも向き合っていくと良いだろう。

大学入試と日本の教育が変わる節目に 中学入試で求められる力が変化

そして、次の⑦～⑫の傾向は、いずれも先の⑤の「**私立中入試の多様化**」の典型例にあたる。

⑦「算数1科入試」に代表される「得意科目選択型入試」の増加。

⇒個々の小学生の学力特性を考慮し、受験生の「強み」や「得意」な教科の力を評価する「得意科目選択型入試」が増加。

⑧「適性検査型入試」の増加。

⇒いわゆる「新タイプ入試」のなかの最大多数派。公立中高一貫校で実施される「適性検査」の出題に似た形式で、それに挑む前のトレーニングや経験にもなる、私立中による「適性検査型入試」が増加。すでに今春2019年入試では、首都圏の私立中の約半数にあたる147校が導入。先に文部科学省が提示した、新たな「大学入学共通テスト」のサンプル問題にも酷似した「適性検査」問題は、「非教科型入試」とも呼ばれている。

⑨「総合型・合科型・論述型入試」の増加。

⇒教科の枠組みにとらわれない、教科融合型や、ひとつのテーマを多角的・総合的に考えさせる「総合型・合科型・論述型」の入試も増加。これも当初の「大学入試改革」案に提示されたコンセプトの反映。

⑩「思考力入試」の増加。

⇒新たな大学入試で求められる「思考力・判断力・表現力」のなかの「思考力」にスポットを当て、個々の受験生の「考える力」を引き出し、試す入試の増加。まだ少数派で

はあるが、男子校では聖学院、静岡聖光学院、女子校では十文字、聖ドミニコ学園、文京学院大学女子、共学校では工学院大学附属、聖徳学園、淑徳巣鴨などが実施。

⑪「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」の増加。

⇒「進学塾に2～3年通って受験勉強をする」従来の受験準備スタイルから、習い事やスポーツ、芸術などとの両立を図りながら中学受験にチャレンジする小学生の多様な潜在的能力を引き出す「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」も増加。

これもまだ少数派ではあるが、先駆けである宝仙学園共学部理数インターや中村中のほかにも、すでに20数校が導入。今春2019年入試の注目校であった武蔵野大学中（共学化初年度）やドルトン東京学園中（実質的な中高一貫校の新設）でも、改革・新設の初年度から導入されている。

⑫「英語（選択）入試」の増加。

⇒これもやはり今後の「大学入試改革」を先取りした傾向。帰国生入試ではかなり以前から行われてきたが、国内でも幼少時から英会話スクールなどで英語を学んできた小学生の英語力や英語学習に対する意欲を評価。英検などの英語民間検定の資格（3級～準1級）所持者を優遇する「英語資格入試」も増加。来春2020年入試では、湘南白百合学園や三輪田学園、日大豊山女子などで新設。今後も増える見込み。

これらの「新タイプ入試」が、「2020年度以

どうなった？ 今春2019年の中学入試

★私学の「**適性検査型(思考力型)入試**」の実施校は「**136校**」→「**147校**」に増加し、**のべ応募者数は「12,300名台**」へ！

→今春も首都圏模試センター予想の「**145校**」以上に！

2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
38校	53校	86校	120校	136校	147校
1,989名	3,069名	7,000名	8,000名	11,991名	12,300名

どうなった？ 今春2019年の中学入試

★私学の「英語(選択)入試」の実施校は
今春の「112校」→「125校」に増加し、志願
者は「1500名」→「1800～2,000名」に！

→今春も首都圏模試センター予想の「120校」を超過



降の大学入試]のコンセプトを反映し、それを先取りしたものであるならば、多くの受験生にとって、こうした受験機会に積極的に目を向け、「わが子の強みを生かし」、「わが子の資質や潜在的能力を引き出してくれる」新たな入試と受け止め、そこに挑んでいくこと自体が、大きな意味を持つ。そうした入試と向き合うことが、やがてわが子が挑む「2025年度の大学入試」で問われる力を育てるきっかけとなるからだ。

たとえば、先の⑧に紹介した「『適性検査型入試』の増加」などは、文部科学省が一昨年5月に公表した「大学入学共通テスト」のサンプル問題とも酷似した、公立中高一貫校の「適性検査」に通じる形式であり、現在～近い将来の入試や学力テストのあり方に一石を投じるものでもある。

都内の併設型中高一貫校5校が、この先2021年～2022年にかけて、いずれも「高校募集を停止」して、「中学募集定員を増やし」その結果、完全中高一貫校に移行することは、この「適性検査」市場の拡大(=それを受検する小学生の増加)を意味している。

一方では、すでに国立大学附属校のなかでも、東京大学附属中や東京学芸大学附属国際中などは、従来の「教科型」入試から「適性検査」に移行しており、お茶の水女子大学附属中も、2021年入試から「適性検査」に移行する。つまり国の教育研究・教育実習機関である国立大学の附属各校も、「新たな入試選抜のあり方」を模索し、すでに変化をし始めているということだ。

そのほかにも首都圏では、来春2020年から

2022年にかけての3年間で、茨城県の県立トップ高校11校が、相次いで中学募集を開始する。埼玉県では、川口市立の中高一貫校が2021年に誕生する。これによって、そのエリアには新たに「適性検査」市場が生まれることになり、従来の「教科型」入試から「非教科型」入試への“大きなうねり”が、今後さらに波紋を広げることを意味している。

また「英語入試」については、今春さいたま市に“首都圏初の公立中高一貫の「IB(国際バカロレア)スクール」として開校した、さいたま市立大宮国際中等教育学校が、初年度から自校の「適性検査」のなかに英語の出題を入れてきた。つまり、「公立学校でも入試選抜に英語を課す」時代になったということだ。同様に今春2019年入試から、慶應義塾湘南藤沢中等部が国・算・英の3教科による「英語選択入試」を新設したことも、今後大きく影響することは間違いない。

「中学入試が変わる」変わるムーブメントを
「私立中コラボフェスタ」で体験！

ちなみに首都圏模試センターでは、9月の模試に続いて、今回10月の模試でも、受験生全員に「新入試体験！ 私立中コラボフェスタ」という、新タイプ入試の体験イベントの案内を配布した。11月4日(月・祝)に東京2会場(和洋九段女子中会場と文化学園大学杉並中会場)、12月1日(日)に神奈川1会場(相模女子大学中会場)で開催されるものなので、関心のある受験生と保護者には、ぜひご参加いただくと良いだろう。

すでに今春2019年入試では、147校もの私立中学校が、こうした「適性検査型(思考力型・総合型・自己アピール(プレゼンテーション型)入試)」を実施し、来春2020年入試では、これを大きく上回る150～160校がこうした入試を導入すると予想される。

このほか、「英語(選択)入試」も今春2019年には125校で実施され、やはり来春2020年入試



ではそれを20校ほど上回る「140～150校」が実施すると予想されている。

それは、1年3か月後の2020年度の大学入試をきっかけに、今後の「大学入試が変わり」、「日本の教育が変わる」節目を前に、早くもその方向性を先取りした私立中高一貫校の先見性によって「中学入試も変わる」という、大きなムーブメントの兆しでもある。

その意味でも、来春2020年入試に向けて、さらに「私立中入試の多様化」が進むという動きについては、従来の「4科目」「2科目」入試の難関

校を志望する受験生と保護者も、やはり意識しておくべきだろう。

2025年度に大学受験を迎える現在の小6のお子さんたちが、2020年度の大学入試から5年を経て大きく変わる「新たな大学入試」の本格的な当事者になることは間違いない。

だからこそ「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身につけるのか」が、わが子の将来にとってかつてないほど重要な意味を持つ時代になっているのだ。

激動の2020年入試で“合格”を得るために、模試を上手に利用しよう！ ～「継続して受ける」ことで学力を育て、自信をつけることができる！～

首都圏模試センターの「小6統一合判」テストも、この10月14日で第4回を迎えた。6年生では12月までに残り2回、計6回の模試が行われるが、この機会を十分に活用して、来春2020年入試での“合格”のステップにしてほしい。そのための、こうした模試の上手な利用法は、何より「継続して受ける」ことだ。

それによって、

- ①**毎回の成績の推移と、受験生のなかでの自分の位置を知り、受験勉強の成果（手ごたえ）を確かめることができる。**
- ②**志望校の最新の入試情報と人気動向を知り、ベストの受験（併願）作戦を組み立てていくことができる。**

- ③**毎回のテストで力試しができると同時に、中学入試の“合格”に直結する実戦的な学力を育てることができる。**

といった、いくつものメリットが得られる。そのためにも、毎回のテストでは、成績表や結果判定などのアウトプット資料をよく確かめ、試験問題や答案には何度も目を通して、しっかりと「おさらい」しておく必要がある。

また、最近の小学生の皆さんは、まだまだこういった長時間のテストを緊張感のある状態で受けることに慣れていない。これまでにもお通りの塾での内部テストは何度も受けてきたと思うが、会場が変わって、周囲に初めて顔をあわせる子どもたちがいるなかでの（＝入試本番のような）テストには、また違った緊張感がある。こうした雰囲気ですでに早く慣れて、入試の本番でも感じるような、この緊張感



昨年9月9日（日）に行われた「統一合判模試」東海大相模中会場での学校説明会では、国内屈指の総合大学の付属校としての教育展開の魅力を聞くことができました！

も味方につけて、十分に力を発揮できるようになっておきたい。

保護者の皆さんは、毎回の成績や志望校判定に一喜一憂するのではなく、客観的に結果を受け止め、それをプラスに生かすための工夫をしてほしい。どのような結果（成績）であったとしても、その都度お子さんを励まし、学力的に成長するための材料にすることを心がけていただきたいのだ。

また、テスト会場での説明会など、最新の入試情報が聴ける機会には、必ず参加して説明を聴いておくべきだろう。

こうして親子で上手に模試を利用することができれば、継続して受けることがやがてお子さんの自信にもつながり、来る2020年入試での“合格”への、力強いステップになるに違いない。

模試を受けることで、第一志望への課題と、ベストの併願作戦を組み立てるヒントを探ろう！

～「継続して受ける」ことで、合格へのチャンスが見えてくる！～

翌年の中学入試に挑む6年生が、模試を受けることで得られるメリットは、前のページのコラムで述べた通りだ。さらにこれを、親の立場で生かすべきことにしぼって、以下にポイントをまとめてみよう。

●第1志望校との距離を測り、課題を見つける

毎回の合格判定の結果や成績をもとに、お子さんの第1志望校の合格の目安（＝入試予想難度）と、現時点での成績とを考え合わせて、その学校への合格可能性や、そこまでの距離を測り、残された時間で何を重要課題として、親子それぞれが何をすべきかを検討する。

同時に、11月以降の模試の結果が出る頃には「受験する学校を確定する」気持ちで、併願校選びのための情報収集や検討を進めておく。

●豊富な経験を生かしたアドバイスを聞く

毎回の模試の会場では、入試に向かうためのアドバイスが聞ける、保護者向けの説明会（講演）が行われていることが多い。そこでは、中学入試に関する豊富な知識や関わった経験・事例をもつ講演者から、入試本番に向けての準備や、入試の最中にも役に立つ話を聞くことができる。

また、単なる情報だけではなく、わが子のサポート役を務めるなかで、迷いや悩みをもつ保護者を励まし、力づけてくれるような話も聞ける。そうした機会には、積極的に足を運んで、勇気や元気をもらうことができるといいだろう。

●志望動向の変化による予想・分析を生かす

毎回の合格判定では、その月の志望動向（志望者数や成績分布）などをもとに、入試予想が立てられ、それが翌月の合格判定に生かされる。

そうした志望者数の数字やデータは、個々の成績表（アウトプット）にも反映される。それぞれの志望校の動向は、個々の成績表を見ることでわかるが、もうひとつ、全体状況のなかで、それぞれの動向がどうなっていくかという予測・分析については、やはり専門家の意見を聞いたり、配布された詳細な資料を見る必要がある。

それまでは気がつかなかった視点や、見落としていた情報を提供してくれることも多いはず。

この時期までに、おそらくほとんどの家庭では、



模試を受けるメリットは、多くの受験生のなかでの相対的な位置を知り、自分の目標への距離と課題を確かめることができることだ。

わが子の第1志望校、第2志望校については、詳細な情報を集めて、その学校についての理解を深めていることだろう。しかし、第3志望以下の併願校については、まだ十分な情報収集ができていないとはいえないのではないだろうか。

そうした併願校選びに際しては、これまで持っていた知識や視点での見方だけではなく、新たな知識や視点に気づかせてくれる専門家の意見が役に立つことが多い。たとえば、それまではわが子に午後入試を受験させることを考えていなかった保護者が、模試でのアドバイスを聞いたことによって、そのメリットや意味を知って、入試後になってみると「午後入試も受けておいてよかった…」と思えることも多いのだ。

●併願校を選ぶ多様な視点と最新情報を生かす

上に述べたことは、入試状況を知るためだけではなく、それぞれの学校を、もっとよく知るためにも大切だ。

とくに併願校を選んでいく際には、ややもすると、古い情報や評判にとらわれて、選択の幅が狭くなりがちなこと事実。数年前までは、まだ成果の出ていなかった私学が、最近になって目覚ましい成果や実績を上げ、あるいは急速な変化・発展を遂げて、今後が大いに期待できる学校になっているケースは多い。

最新の学校情報によって、そうしたことに気づかせてくれるのも、模試を受けることで得られる大きなメリットということができるだろう。その意味では、会場での保護者向けの説明会（講演）や配布資料に、しっかりと耳を傾け、目を通していただくことが望ましいということを強調しておきたい。